

これからの

2010 ● Autumn

秋

幼児教育を考える

特集

特別なニーズをもつ子に
寄り添う保育とは？

— 特別支援教育・障害児保育を考える —

連載

はじめよう！ 園内研修

無理なく継続できて、要録作成にも役立つ
「保育記録」レベルアップ研修

調査データ

データから見る 幼児教育

幼児の生活と子育て意識
～5年の変化～



1 特集

特別なニーズをもつ子に寄り添う保育とは？

—— 特別支援教育・障害児保育を考える ——

- 2 インタビュー 幼児教育の視点から考える
一人ひとりの心に寄り添う姿勢が特別なニーズをもつ子への支援につながる
国立特別支援教育総合研究所理事長 小田 豊
- 5 インタビュー 医療の視点から考える
正しい知識とカウンセリングマインドで特別なニーズにこたえる
お茶の水女子大学 大学院人間文化創成科学研究科教授 榊原洋一
- 8 事例紹介1 特別なニーズをもつ子を支える CASE1
「その子らしさ」を受けとめたくて集団生活に溶け込むベースを育てる
葛飾こどもの園幼稚園
- 11 事例紹介2 特別なニーズをもつ子を支える CASE2
保育者の「みんなで見守る」姿が周囲の子どもも育てる
村山中藤保育園「櫻」

14 はじめよう！ 園内研修

無理なく継続できて、要録作成にも役立つ
「保育記録」レベルアップ研修

20 調査データ

データから見る 幼児教育
幼児の生活と子育て意識 ～5年の変化～

| | | | |
|-----------|----|----------------|----|
| 起床時刻・就寝時刻 | 20 | 幼稚園・保育園への要望 | 23 |
| 母親の子育て意識 | 21 | 習い事をしている比率／教育費 | 24 |
| 母親の子育て意識 | 22 | | |

表紙の写真

葛飾こどもの園幼稚園

保育者が用意した遊びの中から、子どもたちは好きなものを選びます。粘土遊びを選んだ子どもたちは、腕や顔に粘土が付くのも気にせず、自由に作品をつくり、友だちとうれしそうに見せ合っていました。

ベネッセ
次世代育成研究所
とは

少子高齢化、核家族化のさらなる進行、女性の社会進出、経済のグローバル化、ITによる情報化など、社会環境の変化が加速し、家族のあり方や親子関係を含めた子どもの成育環境に大きな変化が起こっています。

ベネッセ次世代育成研究所は、子育て世代の生活視点を大切にしながら、妊娠出産、子育て、保育・幼児教育、子育て世代のワークライフバランスを研究領域として、家族と子どもが「よく生きる」ための学術的な調査研究と体系的な理念の構築を行います。

また、その調査研究成果を子育て世代を支える産科・小児科などの医療機関、保育・幼児教育の専門家の方々に発信し、よりよい子育て環境を作る一助となることを目指します。

さらには、調査研究ネットワークを海外へも広げ、複眼的、学際的視点から日本の次世代育成を考えていきます。

特集

特別なニーズをもつ子に
寄り添う保育とは？

近年、発達障害がある子どもへの対応が、各園での大きなテーマのひとつになっています。保育者は発達障害をどのようにとらえ、子どもと向き合えばよいのでしょうか。おふたりの専門家のインタビューと、発達障害がある子どもの支援を園全体で行ってきた2つの園の事例から考えます。

はじめに

「特別支援教育・障害児保育」を取り上げた背景

「気になる子への対応」に
高い関心が寄せられている

発達障害がある子どもをどのように支えるかは、多くの園で重要な課題になっています。本誌の読者アンケートからも「気になる子」が増えていると実感している園が多いことが明らかになるとともに、「発達障害があると思われる子どもの保護者への対応について知りたい」など、子どもや保護者にどう向き合うか、現場の保育者が模索していることがわかりました。さらに、08年度に改訂（定）された幼稚園教育要領^{※1}や保育所保育指針^{※2}でも、特別支援教育・障害児保育の重要性が指摘されています。

「特別なニーズをもつ子」とい
う言葉に込めた思い

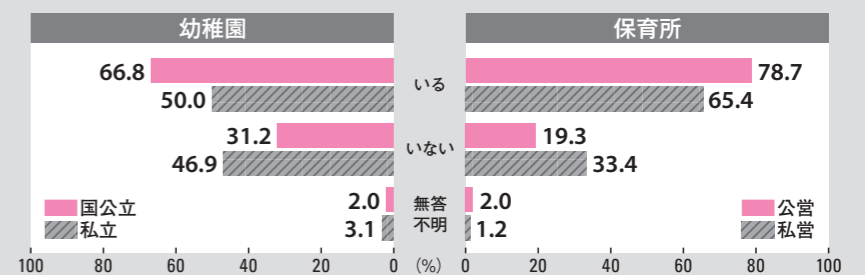
発達障害がある子どもへの支援は、よく「特別支援」「特別な配慮」といった言葉で表されますが、今回、記事では「特別なニーズ」とい

う言葉を使っています。これは、専門家や実践を重ねる保育者のかたがたとお話しする中で出合った言葉です。「支援」「配慮」という保育者からの言葉よりも、子どもの側に視点を置いた「ニーズ」という言葉で、このテーマに向き合うことで、発達障害がある子どもをより理解することができると考えました。

特別なニーズをもつ子どもが、豊かに育っていくために、保育者には何が求められているのか。これからも一緒に考えていきたいと思っています。



図1 特別に支援を要する園児・障害児



※1 第3章-第1-2
※2 第4章-1-(3)-ウ

インタビュー

●●● 幼児教育の視点から支援を考える ●●●

一人ひとりの心に寄り添う姿勢が特別なニーズをもつ子への支援につながる

特別なニーズをもつ子どもの支援では、保護者と連携しながら子どもが安心して過ごせる場所を整えることが大切です。そのためには、個々の保育者に対応を委ねるのではなく、園全体が“チーム”となって組織的に取り組む必要があります。園としての方針を固め、保育者の間で対応を共有するには、どのようなことを大切にすればよいのでしょうか。独立行政法人国立特別支援教育総合研究所の小田豊理事長にお話をうかがいました。



国立特別支援教育総合研究所理事長
小田 豊

おだ・ゆたか
文部科学省初等中等教育局主任視学官を経て現職。著書に、『家庭のなかのカウンセリング・マインド』（北大路書房）、『新しい時代を拓く幼児教育学入門』（東洋館出版社）など。

幼児期の子どもは本来誰もが「気になる存在」であるべき

近年、幼児教育にかかわるかたがたから、「気になる子どもが増えてきている」という話をよく聞きます。その背景には、2005年に施行された発達障害者支援法により、ADHD（注意欠陥多動性障害）やLD（学習障害）、自閉症、アスペルガー症候群などが「発達障害」として正式

に位置付けられ、広く知られるようになったことがあると思われます。以前なら「少し変わっているな」としか感じなかったケースでも、「発達障害かもしれない」と気になりやすくなっていることは意識しておく必要があるでしょう。実際に増えているかどうかは、研究者でも意見が分かれています。今のところ、人数は一定で推移しているものの、子どもの数が減っているため、「出現率」は高まっていると

いう見方が優勢ですが、これも断定されているわけではありません。発達障害者支援法は、発達障害の早期発見の重要性を強調しています。できるだけ早い時期から状態に合わせた支援を行うことで、子どもが安心できる場所をつくり出し、一人ひとりのよさを伸ばしやすくなるからです。一般に発達障害は、3歳ごろから特徴的な言動が表れますから、保育者は発達障害を発見しやすい立場

にあります。その意味では、すべての保育者が発達障害についての正しい知識をもち、子どもの様子を観察することが求められます。

ただし、幼児期の子どもは発達の個人差が非常に大きいことに気をつけなくてはなりません。例えば、ADHDの典型である「じっとしてられない」「自分が思いついたことを一方的にしゃべる」といった傾向は、幼児期の子どもが多くに見られるでしょう。幼児期の子どもが発達障害を判断するのは、専門家でも容易ではありません。他の子どもと少し違うからといって、「気になる子」と“レッテル”をはってしまうのは大変危険です。

保育者に求められるのは、「発達の途上にある幼児期は、元来、一人ひとりが気になる存在」であるという姿勢です。一人ひとり全く違う個性やニーズをもつことを前提にして、目の前の子どもに合った支援を追求するという幼児教育の原点に立ち戻ることが、発達障害の子どもを含め、すべての子どもにとってのよりよい保育につながるとお考えください。

4つの態度を意識して子どもの心に寄り添う

発達障害にかかわる問題は非常に難しいですから、個々の保育者に委ねるのではなく、園全体がチームとして取り組む必要があるでしょう。最初に園内で共有していただきたいのが、発達障害をもつ子どもの支援で大切にしたい4つの態度で

発達障害の子どもへの支援で大切にしたい「4つの態度」

子どもの話を「聴く」

保育者自身がしっかりと心を傾けて「聴く」ことが大切。保育者が自分の話を真剣に聴いていることを敏感に感じ取れると子どもは安心し、次第に心を開きます。

子どもを「受け入れる」

子どもにとって最もつらいのは、「自分が受け入れられていない」と感じることです。まずは子どもの視点から考えるように心がけてください。

関心を最大に払いながら、ほうっておく

注意したい気持ちを抑え、子どもの気になる言動を「ほうっておく」ことも大切です。できるだけ叱るのを控えてよさをほめることで、子どもの自尊心が高まります。

心の流れに添う

子どもの気持ちを決めつけたり、性急に正しい答えを教えたりするのではなく、子どもが何を感じ、考えているのかを聞き出し、子どもの心に寄り添った対応を心がけてください。

す。これは発達障害をもつ子どもだけでなく、すべての子どもに対して大切な態度です。

一つ目は、子どもの話を「聴く」ことです。適当にあいづちを打って聞き流すのではなく、「あなたの話を真剣に聴いていますよ」という強い印象を与えることで、子どもの中に安心感や信頼感が生まれます。

同時に子どもを「受け入れる」態度も大切にしてください。すべての子どもがもつ「自分を受け入れてほしい」という願望にしっかりとこたえるのです。

例を挙げましょう。登園後に決められた場所にかばんを置くというルールを守れない3歳児がいました。一日中、肩からさげて手放そうとしません。保育者は「邪魔にならないの？」などと声をかけつつ、子どものこだわりを受け入れて無理にルールに従わせませんでした。すると、3歳の終わり頃のある日、突然自分からかばんを置いて、以後は

何の問題もなく過ごしたのです。保育者が忍耐強く受け入れたことで、周囲の子どもに比べて時間はかかりましたが、本人がルールに納得して行動を変化させたのでしよう。

「関心を最大に払いながら、ほうっておく」という態度も大切です。発達障害の子どもは、「他の子どもと同じようにさせたい」という周囲の考えから、指示や命令、叱責を受けやすくなります。しかし、大抵、それはよくない結果を招きます。子どもの自己肯定感が低下し、成長に伴って不登校や暴力などの二次的障害が表れやすくなるのです。子どもが話を聞かないときなどに注意したくなる気持ちは分かりますが、あえてほうっておいて、じっくりと向き合える別の場面で伝えることも考えてみてください。

最後に、「心の流れに添う」という態度について説明しましょう。例えば、子どもから何か質問されたときに、大人はつい「正しい答え」を

教えるという気持ちで子どもに接しがちです。しかし、大人から性急に答えを示すのではなく、まず「あなたは思うの？」と聞いてみてください。きっと、大人には考えつけない答えが返ってくるでしょう。子どもの言葉に耳を傾け、子どもの心のありようを知ろうとする態度が、「心の流れに添う」ことです。それは子どもを深く理解するためにとっても大切です。

とくに発達障害の子どもは、知的に問題のない場合が多いため、他の子どもとは異なる心の動きをすることが見逃されがちです。ADHDやLDなどの子どもの多くは、何をすべきかを理解しているけれど、できないという自分に対して強いいら立ちを感じています。例えば、あなたが利き手ではない方の手に軍手をつけて一定時間内に文字の書き取りを指示されたとします。きっと思い通りに手が動かないことに焦り、いら立つでしょう。子どもの心の動きに注意を払い、寄り添うことで、一人ひとりに合った支援が見えてきます。

「一緒に考える姿勢」を保護者に示す

保護者への対応も、園としての一貫した方針をもつ必要があります。発達障害の子どもは、乳幼児期から「少し変わっているかもしれない」などと気づいている場合が多く、それとなく保育者に相談することがよくあります。そのようなとき、発達障害の可能性を認識し

ている保育者が、「大丈夫ですよ」「このまま見守りましょう」などと伝えることが少なくありません。こうした言葉は安心させたいという気持ちの表れであって、あまりよい結果を招きません。なぜなら、「相談に向き合ってもらえなかった」と不信感を抱かれることもあるかもしれません。「先生が言うのなら大丈夫だ」と安心させて、よりよい支援法を見つける機会を先送りしてしまうこともあるからです。保育者が園での様子を伝え、「一緒に支援を考えていきましょう」という態度を示すことで、保護者がひとりで悩みを抱え込まずに済みますし、連携して効果的な支援を行うこともできます。

さらに発達障害をもつ子どもの保護者に共通するのが、「よい親であらねばならない」という強いプレッシャーにさいなまれていることです。発達障害は育て方には起因しませんが、「しつけが悪かったのでは」といった自責の念をもつ保護



者がとても多いのです。当然のことではありますが、発達障害にかかわる対応のほかは、他の子どもの保護者と同様に接し、「無理する必要はなく、みなと同じように“普通”の親であっていい」というメッセージを伝えることは、保護者にとっては大きな励みになるでしょう。

繰り返しになりますが、幼児教育の原点に立ち戻って一人ひとりのニーズに合わせた支援を追求することが、結果的に発達障害の子どもへの有効な支援に結びつくことを、保育者のみなさんは心に留めておいていただきたいと思います。それは、教科の到達目標に向かって指導する小学校以降の教育とは違って、一人ひとりの心に寄り添って個性を伸ばしていく幼児教育だからこそできることでもあるのです。

現場のみなさんへ

◎幼児期は、人格の基盤を形成する非常に大切な時期です。そのような意義深い仕事に携わっていることに自信と誇りをもってください。ふだんから一人ひとりの気持ちに寄り添うことを大切にする保育者のみなさんは、きっと発達障害の子どもにも適切に接することができると思います。保護者のかたがたの気持ちを受けとめ、手を取り合いながら取り組みを深めていただければと思います。

インタビュー

●●● 医療の視点から支援を考える ●●●

正しい知識とカウンセリングマインドで特別なニーズにこたえる

特別なニーズをもつ子どもの中でも、注意欠陥多動性障害（ADHD）やアスペルガー症候群といった発達障害がある子どもは、周囲の子どもと比べて行動パターンが異なるため、適切な対応が難しいという園も少なくないようです。発達障害がある子ども、そしてその保護者への対応では、どのようなことに配慮すればよいのでしょうか。医師として発達障害の研究に取り組むお茶の水女子大学教授の榊原洋一先生にお話をうかがいました。



お茶の水女子大学
大学院人間文化創成科学研究科教授
榊原洋一

さかきはら・よういち

東京大学医学部卒業。東京大学医学部附属病院小児科を経て現職。専門は小児科学や小児神経学、発達神経学で、とくにADHDやアスペルガー症候群をはじめ、発達障害の臨床研究に力を入れている。著書に『図解 よくわかるADHD』『図解 よくわかる自閉症』（ナツメ社）、「集中できない子どもたち—ADHDなんでもQ&A」（小学館）など。

正しい知識による「見立て」で適切な対応がわかってくる

保育者のみなさんは、日々の保育を通してすべての子どもがそれぞれ異なるニーズをもつことを実感されているでしょう。そして経験や知識をもとに、個々の子どもへの対応の仕方を判断されているのではないのでしょうか。

特別なニーズをもつ子どもへの対応でも、基本的な考え方は同じで

す。ただし、周囲の子どもと比べて学習や行動のパターンが異なるうえに、個人差も大きいため、より注意深くニーズを観察して対応する必要があります。そのためには、発達障害への正しい理解が欠かせません。子どもの中にある行動の理由を理解できれば、適切な対応の仕方が見えてくるでしょう。

2002年に行われた文部科学省の調査では、小学校・中学校の通常学級に在籍する児童・生徒のうち6.3%

が発達障害がある可能性が示されました。発達障害には、ADHDやLD、自閉症、アスペルガー症候群などが含まれ、それぞれに特徴的な言動があります（6ページ図1）。

発達障害がある子どもの言動について知識を深めることで、保育者はそのような子どもの「見立て」ができるようになります。見立てとは、例えば、「こんな行動が見られるから、ADHDの可能性を考えた方がよいかもしれない」と仮定

図1 発達障害の特徴や対応のポイント

| 発達障害の名称 | 症状の特徴 | 園での対応の例 |
|--------------------------------------|---|---|
| 注意欠陥多動性障害 (ADHD) | <ul style="list-style-type: none"> 不注意(物事に集中できず、忘れっぽい) 多動性(落ち着きがなく、じっとしてられない) 衝動性(衝動的な行動やとっぴな行動をとる) | <ul style="list-style-type: none"> 最前列の中央に座らせる。窓際や入口付近など雑音が聞こえる場所は避ける ルールや目標は見えやすい位置に掲示する 活動を短く区切って途中で小休止を入れる 子どもが話を聞かないときは、声に加え、肩をたたか手にさわるなどして合図する 問題行動は「叱る」のではなく、「注意する」(「水を出しっ放しにしちゃダメ!」ではなく、「水を出しっ放しにしない約束だよね」) |
| アスペルガー症候群 (知的な遅れやことばの遅れはない) | <ul style="list-style-type: none"> 言葉の理解や使い方が独特(たとえ話が分からない、人の話を聞くのが苦手) 相手の気持ちやその場の状況を読み取るのが苦手 興味や関心が狭く特定のものにこだわる(物事の順序にこだわるなど) | <ul style="list-style-type: none"> みんなで座って話を聞く場面などでは、なるべく保育者の近くに座らせる 子どもの気持ちが落ち着かないときの「避難場所」となる部屋や空間(狭い場所を好むことが多い)を用意しておく 指示する前に、「よく聞いておいてね」などと、注意を促す 予定の変更があるときは、直前ではなく、早めに伝える |
| 高機能自閉症 (知的障害が軽いかまったくない自閉症を指す) | <ul style="list-style-type: none"> 言葉の発達に遅れがある 相手の気持ちやその場の状況を読み取るのが苦手 興味や関心が狭く特定のものにこだわる(物事の順序にこだわる、同じ動作を繰り返すなど) | |

※読み書きや計算などの能力の習得が困難な「学習障害(LD)」の症状は、小学校に進んでから表れやすい。
 ※アスペルガー症候群と高機能自閉症は、言語能力の遅れの有無以外に大きな違いはなく、同じ障害ととらえる専門家もいる。

して考えることです。発達障害の可能性を念頭に置くことで、保育者は発達障害に関する書籍や研究例などから対応のヒントを考えることができるようになります。ただし、注意したいのは見立てはあくまでも仮定であり、“レッテル”をはることは大きく異なるという点です。大人の視点から決め付けてしまうのではなく、常に子どもの立場に寄り添うように心がけたいものです。

「病気」と思うのではなく「違い」ととらえる

発達障害は生まれつきのものがあり、しつけが悪いことが原因ではありません。ただし、周囲の対応の仕方によって行動の表れ方は変わります。周囲の大人の対応の違いに

より、ADHDの子どもがどのように発達するかを調べた研究があります。いつも叱っていると状態が悪化する傾向がありますが、子どもの気持ちを受け入れて育てると、次第に問題行動は少なくなります。

発達障害がある子どもへの対応で何より心がけなくてはならないのが、「障害を治す」というスタンスを取らないことです。発達障害は「治さなければならないもの」ではなく、「違い」ととらえる必要があります。「問題」は、子どもの中にあるのではなく、子どもの行動によって起こる周囲との摩擦の中にあるのです。

そう考えると、いかに摩擦を起こしにくい環境を整えるかが、対応のポイントになることを理解していただけるのではないのでしょうか。発

達障害の種類によって異なりますが、例えばADHDの場合、「なるべく最前列の中央に座らせる」「視覚や聴覚の刺激が入りやすい窓際や入口近くは避ける」といった対応によって、問題となる行動が表れにくくなります。

摩擦が見られたときでも、子どもには決して悪気はありませんから、頭ごなしに注意することは避けたいものです。

また、周囲との摩擦は、子どもではなく周囲の大人がかかわることで軽減できる、という視点も重要です。子どもが力を発揮できる環境で育つことで、次第に自尊感情は高まり、周囲の子どもとのかかわり方も学んで、特有の行動が表れにくくなります。

園での様子を具体的に伝え 保護者と信頼関係を築く

次に、発達障害がある子どもの保護者への対応について考えたいと思います。

現代日本では少子化によって、子育ての経験が減っています。初めての子もだときょうだいと比べることができませんから、保護者が発達障害の可能性に気づきにくくなっているのは当然と言えるでしょう。そのため、毎日たくさんの子どものを見て、「3歳児ならこれくらいはできるだろう」といった物差しをもつ保育者の存在が重要になります。

発達障害はデリケートな問題ですから、保護者への情報の伝え方には細心の注意を払わなくてはなりません。発達障害が疑われる場合でも、「発達障害があるようですから病院で見てもらってください」などと断定的に言うのはいけません。この場合、保護者は「自分ひとりで問題を背負い込まされている」と感じたり、「園から追い出されるかもしれない」と思って防御的になったりして、その後の連携が難しくなります。

まずは、発達障害という言葉を使わず、「集団の中でじっとしてられない」「なかなか保育者の指示が理解できない」などと、具体的な問題を伝えます。クラスに入って保護者にも見ってもらうか、難しい場合は保護者から許可を受けたくてビデオ撮影してもいいでしょう。実際

の場面を見てもらえば、保護者の納得は得られやすくなります。

同時に、園ではどのような対応や指示、また環境づくりをしているかを具体的に説明しましょう。そのうえで、「それにもかかわらず、うまくいかない」と話せば、保育者の努力は伝わります。

このような段階を経て、はじめて発達障害の可能性に言及し、専門家への相談をすすめます。このときも、「保育者として、お子さんにどのように対応すべきかを知りたいので」などと、協力的なスタンスを保つことが大切です。時間が許せば、保育者も同行するとよいでしょう。保護者は安心し、さらに相互の信頼関係も深まるでしょう。

子どもの成長を支える パートナーという姿勢で

発達障害がある子どもとその保護者に向き合う際には、つねに相手に受容的な態度を示すカウンセリングマインドを大切にしてください。そして、その前提として、保育者には発達障害に関する正しい知識も必要になってきます。



周囲の大人の対応によって、発達障害のある子どもの育ち方が大きく変わるのは前述した通りです。特に幼児期は社会生活の経験が少ないため摩擦を起こしやすいのですが、適切な対応を続けられれば、子どもは成長に伴って周囲とのかかわり方を学んで問題を起こしにくくなります。

そのことを伝えるのは、保護者にとっては励みにも重圧にもなり得るでしょう。保育者が、ともに子どもの成長を支えるパートナーという姿勢を一貫して示すことで、きっと保護者の重圧は和らぎ、前向きな気持ちで子育てに向かうことができるはずです。

現場のみなさんへ

◎特別なニーズをもつ子どもに対し、保育者のみなさんは「自分なり」のやり方を見つけて対応されていると思います。なかなか時間が無いとは思いますが、園内研修などを通して個々の経験を共有してください。そのように横につながれば、子どもの見方がさらに広がってより良い対応ができるようになります。園全体の保育の質は高まっていくはずです。

特別なニーズをもつ子を支える

CASE 1

「その子らしさ」を受けとめたうえで 集団生活に溶け込むベースを育てる

葛飾こどもの園幼稚園（東京都・私立）

さまざまな子どもがかかわり合うことを大切にする葛飾こどもの園幼稚園。年齢の異なる子どもや特別なニーズをもつ子どもと一緒に遊ぶ過程で、お互いを尊重する気持ちを育てています。特別なニーズをもつ子どもには、一人ひとりに合わせたさまざまな保育場面を経ながら安心して集団生活に溶け込んでいけるようにしています。

「違い」から生まれる衝突を育ちのチャンスにする

子どもの本音を大切に 一緒に解決策を考える

日常の中で自然物とふれ合うことを大切にする葛飾こどもの園幼稚園。樹木が生い茂る園庭では、子どもたちがうさぎやにわとり、アヒル、カモなどの動物にふれたり、夏には上半身裸で泥んこ遊びをしたり、思い思いに過ごしています。

さまざまな違いをもつ子どもがかかわり合う環境をつくることも園の方針の一つで、縦割りのクラス編成で異年齢保育を行うと同時に、特別なニーズをもつ子どもの積極的な受け入れを行ってきました。現



季節感を大切にしたい園庭では、年齢の異なる子どもたちが一緒に遊びをつくり出している。

在、138名の園児のうち、特別なニーズをもつ子どもは18名、各クラスに3～4名がいることになりました。こうした環境の中で子どもたちはどのようにかかわり合いながら、ともに育つのでしょうか。加藤和成園長先生が次のように説明します。

「集団の中にさまざまな子どもがいるとお互いの違いを明確に感じ、共に生活するために考える場面が多くなります。動き回る子どもによって活動が中断させられることもあります。こんな時こそ保育者の働きによって、お互いを知り、近づくチャンスにもなるのです」

例えばリレーで足の不自由な子どもがいるグループが負け続けると、周囲の子どもから「〇〇ちゃんがいるから勝てない」といった声があがる場合があります。このとき保育者は、周囲の子どもへの悔しい気持ちを受け止めた上で共に考えていきます。

「負けて悔しいよね。

でも、〇〇ちゃんは大変な仲間だね。なにか良い方法はないかな。〇〇ちゃんにダンボールの車に乗ってもらって、みんなで引っぱるのはどうかな？」など、日常生活の中で共に活動するために柔軟に考えていくのです。

補聴器を使う子どもを見て、周囲の子どもが不思議がるときも、保育者はきちんと説明します。「〇〇ちゃんはお小さくしか音が聞こえないけど、これを付けるとみんなの声が大きく聞こえるんだよ。眼鏡と一緒にだね」などと伝え、一人ひとりの違いを理解するように促します。

こうした保育に欠かせないのが、保育者が特別なニーズをもつ子どもの気持ちや特徴をしっかりと把握していること、そして十分な信頼関係を築いていることです。そのため登園後1時間、特別なニーズをもつ子どもたちにねらいを合わせた“遊びの場”をつくり出します。この小グループ活動の時間は、子どもの気持ちをきちんと受け止め共感する場として大切にされています。

「小グループ活動」で特別なニーズをもつ子とじっくり向き合う

気持ちを受け止めることで 安心感や信頼感をはくむ

特別なニーズをもつ子どもで、ゆっくりとしたかかわりが必要であると園と保護者との話し合いで判断された子どもは、入園後、小グループ活動に参加します。子どもたちは登園後の小グループ活動を中心に園生活を送り、徐々に保育時間を延ばしていきます。2学期以降、園生活に慣れてきたら、みんなと同じ時間帯を過ごすようになります。

各クラスには3名の担任がおり、うち1名が小グループ活動に入ります。小グループ活動には、ほかの園児が遊びにくることも多く、5、6名の保育者と10～15名の子どもが活動に参加します。この小グループ活動について担当の鶴巻直子先生が説明します。



園長
加藤和成先生



小グループ担当
鶴巻直子先生

生が説明します。

「感触遊びや粗大運動などの身体接触を多く取り入れた遊びの場を設定しています。自分で遊びを選んだり、仲間をつくるのはなかなか難しいため、子どもの興味を踏まえて保育者がいくつか遊びの場を考え、ゆったりとかかわっていきます」

大まかな方針は年度初めに話し合い、今年度は歌やリズムにかかわる活動に力を入れています。わらべ歌を歌ったり音楽に合わせて体を動かしたりする活動は、平行遊びであっても仲間と一緒にという雰囲気を感じられるよさがあります。

それでも、子どもが途中で活動から外れたり、興味を示さなかったりすることもあります。そのようなときは、子どもの様子から「今、何を求め、必要としているのか」をじっくりと時間をかけて感じ取ります。そして、その子どもに合う遊びの場を小グループ活動以外の場につくったり、保育者を介して同じ興味をもつ子どもと遊んだりします。

「クラス活動では全体を見ることに追われがちですが、小グループ活動では一人ひとりに焦点を絞れます。言葉だけでなく表情や態度からも、気持ちや感情、興味、さらに成長などを読み取れて、次に何を必要としているのかを感じることができ、一人ひとりの可能性を広げやすくなります」(鶴巻先生)

子どもの中に、自分が認められ、

小グループ活動の流れ



① 登園してすぐの時間はそれぞれの子どもが自由に遊び、保育者は状態をよく観察する。



② 慣れてきたら、子どもの気持ちを尊重しつつ、グループ遊びを取り入れる。



③ 終盤は歌や絵本の読み聞かせなどを行い、仲間とともに過ごす楽しさを伝える。

受け止められているという安心感や信頼感が広がっていきます。小グループ活動は、一人ひとりの子どもが保育者と気持ちをやりとりし、「その子らしさ」を表現できる場として機能しているのです。

小グループ活動の意図を 保護者に丁寧に伝える

保護者とは、入園前、子どもの様

子に気になることがあれば十分に話し合い、必要に応じて小グループ活動への参加をすすめます。

「入園前、小グループ活動に対して周りの子どもから隔てるようなイメージをもつかたもいます。しか

し、子どもによってはゆっくりと気持ちや伝え合う小グループ活動の体験が必要であることを、何日か遊びにきてもらいながら丁寧に説明していくと、大半の保護者のかたは納得されます」（園長先生）

入園後は、送迎時や連絡ノート、父母会などで日々の活動や子どもの育ちを伝えます。話すことが得意ではない子どもの場合、園での様子が伝わりにくいため、特に保護者への丁寧な報告を心がけます。

特別なニーズをもつ子を支える

CASE 2

保育者の「みんなで見守る」姿が周囲の子どもも育てる

なかつう
村山中藤保育園「櫻」（東京都・私立）

村山中藤保育園「櫻」では、保育者みんなで一人ひとりの育ちを支えることを大切にしています。特別なニーズをもつ子に関しては、みんなで指導計画を立て、指導方法を共有し、見守ります。そんな姿を見て、まわりの子どもたちも、特別なニーズをもつ子への接し方を自然に学び、思いやりの心をはぐくんでいます。

子どもたちがともに遊ぶ環境をつくる「コーナー活動」

遊びのテーマや環境に配慮し 一体感を演出する

小グループ活動が終わる10時頃から園庭で体操が始まり、特別なニーズをもつ子どももクラスに集まります。体操に参加せず、まわりで見ただけの子どももいますが、「みんなで弁当を食べられるようになってから体操に誘おう」などと、合流のタイミングや接し方が担任の間で共有されています。

体操のあとは、3名の担任がそれぞれ遊びの場を考え、子どもは好きなコーナーで遊びます。遊びの内容は、なるべくどのような子どもでも入りやすいように配慮されています。例えば水遊びが好きで教室を水浸しにする子どもがいれば、屋外で水遊びをするコーナーを設置し、また、ひとりでの砂遊びにこだわる子どもがいれば、砂場の近くにおままごとコーナーを設置します。興味の対象が自分の遊びにしかない場合でも、他の子どもに「〇〇ちゃんから砂をもらおうね」などと声をかけることで子ども同士がかかわる場面をつくります。

工作や泥遊び、動物とのふれ合いなど多様な遊びを用意。別のクラスのコーナーでも遊べるなど、自由な雰囲気重視する。



すべての子どもたちがともに認め合い、生活するうえで何より大切なのは、「保育者がすべての子どもに分け隔てなく自然にかかわること」と、園の先生がたは口をそろえます。例えば、特別なニーズをもつ子どもには、「周囲の子どもと同じことをさせよう」ではなく、「この子どもにとっては何が楽しみなの



か」と、一人ひとりの違いを認めて接します。すると、その気持ちは周囲の子どもに伝わり、自然に相手を受け入れていく雰囲気が生まれます。保育者の働きを通して、子どもたちがお互いの違いを理解し、尊重し合う関係が育まれているのです。

葛飾こどもの園幼稚園



◎1953年、キリスト教の教会に付設された幼稚園。「自由主義保育」を掲げ、子どもが自然にふれ合いながら自分で遊びをつくり出す自由な活動を重視。昭和30年代に開始した林間保育（自然の中でのお泊まり保育）も特色の一つ。

園長 加藤和成先生

所在地 〒124-0012
東京都葛飾区立石2丁目29番6号

園児数 138名（3歳～5歳児）

子どものニーズを的確に把握し、自ら伸びようとする力を支援

自ら育とうとする子どもの力を 支えたい気持ちが出発点

村山中藤保育園「櫻」が、特別なニーズをもつ子どもの支援に本格的に取り組み始めたのは、1983年のことです。当時園長を務めていた高橋保子先生（現・理事長）は、その理由について次のように話します。

「すべての子どもは、自ら育とうとする力を、心や体の中に秘めています。そして、その力を伸ばす手助けをするのが保育者の役割です。しかし、私たちは、特別なニーズをもつ子どもたちに対して、自ら育とうとする力を伸ばすような支援が本当にできているだろうか。そんなふうに悩むことが少なくありませんでした」

子ども自ら育とうとする力を信じて支援するには、子ども一人ひとりのニーズを的確に把握するという作業が欠かせません。

「特別なニーズをもつ子を理解し支えていくには、まず、保育者が子

どもの発達や障害について正しい知識をもつことが必要なのでは？

子どもを育てる立場にいる以上、『知らない』では預かれないはず……私はそう考えたのです」

高橋先生は、まず子どもの発達や障害についての専門的な知識を職員全体で共有することから始めました。また、子どものニーズを正確に把握するため、積極的にセミナーや勉強会に参加して実践例を学んだり、ときには専門家に直接相談に行ったりしました。

「当時は今と比べて、まだ情報が少なかった時代。少しでも知識や指導のヒントを得るために、医師や大学の研究者のところに足繁く通っていました」と、高橋先生は振り返ります。

こうした活動の中から培われてきたのが、外部の専門家との太いパイプです。現在園では、自閉症研究や障害児教育の専門家に来園してもらい、自分たちの子どもの見方や指導のポイントが適切なものかどうか、アドバイスをいただけていま

す。

園では、病院との連携も深めてきました。特別なニーズをもつ子どもが入園してきたときには、保護者の了解を得たうえで、子どもの主治医と面談をすることもあります。医師が子どもの状態をどのように捉えているか、集団生活を過ごすうえでどんなところに気を付けてほしいと考えているかを、面談によってしっかりと把握し、園での保育に生かします。

また、子どもが療育センターなどで訓練を受けている場合も、その施設のスタッフと面談をして、どんな観点で指導や訓練を行っているかについて話を聞いています。



園では、学年単位での活動の時間と、異年齢集団による縦割りの時間を設定。さまざまなニーズをもつ子ども同士が一緒に活動する機会を多く設ける。

保育者同士の横のつながりを強め、みんなで子どもを支える

保育者みんなで1ヵ月の指導計画を立てる

村山中藤保育園「櫻」では、担任に任せきりにせず、保育者みんなで一人ひとりの子どもの育ちを支えることも大切にしています。

園では月に1回、ME（Medical Education の略）会議を開いています。この会議の目的は、特別なニーズをもつ子ども一人ひとりについて、今どんな部分が気になっているかをみんなで話し合うこと。それまでの1ヵ月間の振り返りと、次月の



担任、担当者が参加するME会議。一人ひとりの子どもの指導計画をじっくりと話し合う。

会議までの1ヵ月間の指導目標や指導方法、配慮しなくてはならないことを指導計画案としてまとめていきます。さらにその内容は、1週間、1日と短期間の計画・目標へと落とし込まれていきます。

毎月の会議に参加するのは園長や副園長、担任、そして、特別なニーズをもつ子を重点的に援助している担当者などです。現在園には特別なニーズをもつ子どもは8名いますが、そのうちの3名に担当者が1対1で付いています。

会議では、担任や担当者が子どもの様子を報告しますが、ほかの保育者からも「園庭でまわりの子とこんなことをして遊んでいたよ」とか、「以前はイヤなことがあると泣いてばかりだったけど、最近は自分の思いを言葉にできるようになったね」といった発言がどんどん出てきます。保育者全員で子どもの育ちを支えようという意識があるため、担当者が一人で抱え込むのではなく、みんなが一緒になって子どもを見ているのです。



副園長 若山望先生



担当者 山口暁子先生



担当者 野口文先生

指導計画の立案の流れ

～小目標への落とし込みと振り返りを重視～



毎月の会議で立てられた月間の指導計画は、週ごとの計画→1日ごとの計画と、落とし込むことで、具体的で、実行しやすい計画になる。定期的に振り返りを行うことで、次の指導計画に生かすことも可能。



生活習慣など、一つひとつの項目ごとに保育を振り返り、次月の計画に生かす。

こうして、複数の保育者による多様な視点から子どもの状態や必要な手立てについて話し合うことで、担任や担当者は、客観的でバランスのとれた計画を立てられます。

今年初めて特別なニーズをもつ子どもを担当する野口文先生は、ほかの保育者と意識を共有できることのメリットをこう説明します。

「例えば、『自分で食事できるようになる』ことを目標にしている子どもがいるとします。ほかの先生がたもその目標を知っていますから、気がついたときは『フォークはこう

自ら伸びる力をサポートするための工夫

◎廊下やトイレの入口の壁には、友だちと仲良く居心地のよい生活を送るためのルールやマナーを表現した写真や絵がたくさん貼られている。言葉だけでは十分に伝わらないことも、ビジュアルを通すと、より子どもに伝わりやすくなる。



やってもった方がいいよ』と子どもに話しかけられます。担任だけでは

見きれないところを、ほかの先生がフォローすることができるのです」

保育者の声かけや対応が、まわりの子どもの思いやりの心を育てる

保育者の言葉のかけ方をまわりの子どもは見ている

専門家とのつながり、保育者同士のつながり以上に、園が大切にしているのが、子ども同士のつながりです。副園長の若山望先生は、「どんなに保育者と子どもの間で信頼関係が築けたとしても、その関係は子どもが卒園すれば終わってしまいます。一番大切なのは子ども同士のつながり。まわりの子どもがその子を理解し、支える関係を築くことができれば、その関係は小学校や中学校でも続きます」と強調します。

そのうえで保育者が配慮しているのが、特別なニーズをもつ子どもへの言葉のかけ方です。周囲の子どもは、保育者が特別なニーズをもつ子どもとどうかかわっているのかわかることで、その子とのかかわり方を学ぶからです。特別なニーズをもつ子を担当して5年目の山口暁子先生は、次のように説明します。「子どもが大きな声を出したと

き、『ダメ!』と叱るのではなく、『〇〇ちゃんは、今こんなイヤなことがあったから大きな声を出しちゃったんだね』と、子どもの気持ちを代弁するようにしています。『ダメ!』と叱ると、まわりの子ども『あの子は大声を出すダメな子』という認識を抱くようになります。気持ちを代弁することで、まわりの子どもも『今、どんな気持ちなのかな?』と、その子の立場に立って考える力が育っていくのです」

現・理事長の高橋先生は、保護者に対して「気になる子どもと一緒にいることで、すべての子どもに思いやりの気持ちが育ちます。いろんな

子どもが共にいることで、一人ひとりが心豊かに育っていきけるのです」とよく話すそうです。自分で靴を履けない子どもがいたら、まわりの子どもがずっと靴箱から靴を取り出して履かせてあげるなど、友だちが困っているときには自然と手助けができる。子どもたちには、そんな心が育っています。

保育者みんなで特別なニーズをもつ子どもを的確に理解し、見守り、そしてその姿を見て、他の子どもたちが思いやりの心をはぐくむ。村山中藤保育園「櫻」が大切にしているのは、人とのつながりの中での育ちです。

村山中藤保育園「櫻」



◎1966年に開園。「人間が人間らしく育つ」ことを保育理念に掲げ、異年齢保育や食育教育などにも力を入れている。園内に子育て支援センターを設置。育児相談や子育て講座などの子育て支援事業にも取り組んでいる。

園長 若山剛先生

所在地 〒208-0003 東京都武蔵村山市中央1-28

園児数 232名

はじめよう！ 園内研修

Vol. 2 無理なく継続できて、要録作成にも役立つ「保育記録」レベルアップ研修

日々の保育記録の大切さは理解しているけれど、忙しくてなかなか徹底できない——このような悩みを抱える保育者は少なくないかもしれません。しかし、ちょっとした工夫により、業務の合間の時間を利用してポイントを押さえた保育記録を作ることには可能です。また「要録」や指導計画を作成する下準備となり、長い目で見ればむしろ負担を小さくすることになるのではないのでしょうか。

保育記録の習慣化によって 子どもの見方が深まり、成長を見逃さない

保育者の成長を促し 園の教育目標も強化

保育をより良いものにしていくために有効に活用したいのが、日常的な子どもの姿や保育者の思いなどを記録する「保育記録」です。2008年の保育所保育指針の改定により、幼稚園だけでなく、保育所でも「要録」の作成が義務づけられ、

年間を通した保育の振り返りがますます重要になりました。しかし、日々の実践の振り返りである保育記録の作成は、保育者全員の取り組みとする園もあれば、個々の保育者に委ねる園もあるなど、園ごとに取り組みの違いが大きいようです。東京成徳大学教授の神長美津子先生は、保育記録の重要性について次のように説明します。

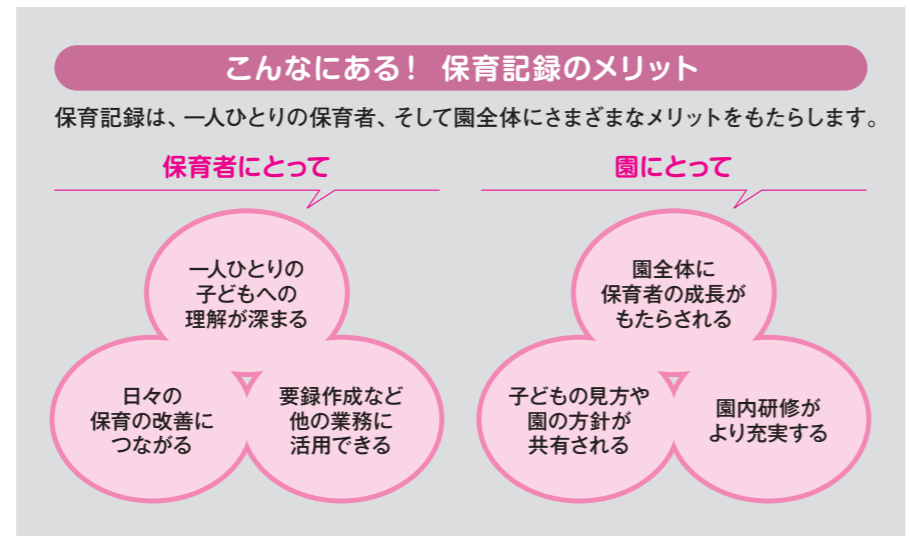
「保育は子どもへの瞬時の対応の積み重ねです。一つひとつの対応を『それきり』のものとして終わらせず、記録として書き残すことで、『子どもにとって、どのような意味があったか』『自分と子どもの関係はどう変わったか』『次に同じ場面があったときはどうすべきか』など、いろいろな視点から振り返り、保育の質を高めていくことができます」



東京成徳大学
神長美津子 教授



東京成徳大学
塩谷香 准教授



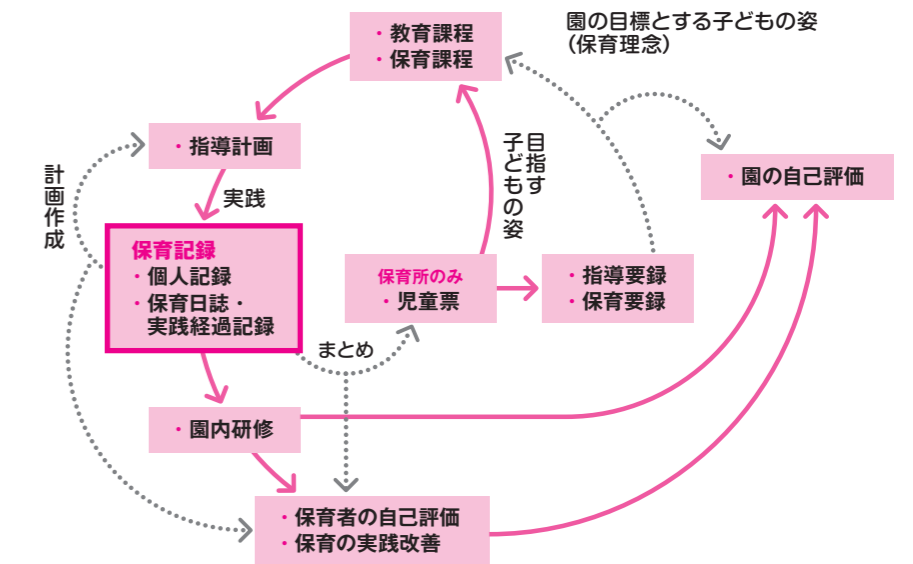
そのように保育記録は、子どもへの理解を深めるとともに、自らの保育を振り返り、課題を見つけるきっかけになるなど、保育者の成長を促すさまざまな効果が期待できます。さらに、園内研修などを通して記録を共有することにより、保育者が共通の見通しをもち、園としての方針を固めていくこともできます。

保育記録の導入で 業務の負担がより小さくなる

しかし、多忙な中ですべての子どもの保育記録を付けるのは、保育者の負担が大き過ぎると考える園もあるのではないのでしょうか。その点について、神長先生は次のように話します。

「心に残ったいくつかのエピソードをそれぞれ2、3行にまとめるだけで立派な保育記録になります。1日の流れを細かく記すのではなく、あとから読み返してその場面を思い出すことができればよいのです。

保育記録と園の活動の関係



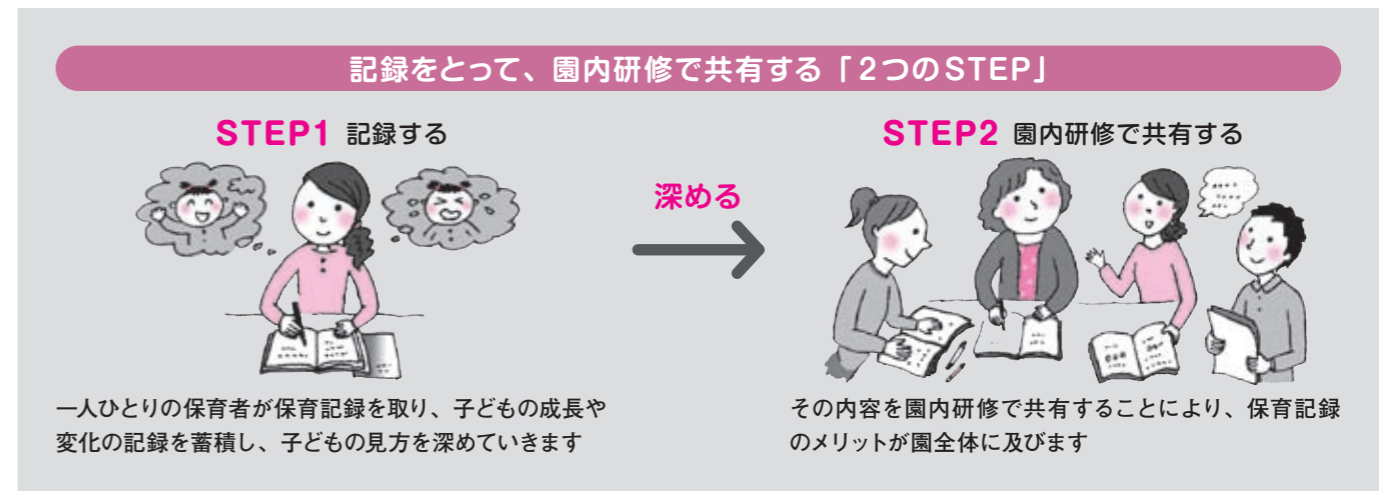
これなら、あまり時間や労力はかからないでしょう」

保育記録の習慣化により、むしろ仕事の流れがスムーズになる効果も期待できます。東京成徳大学准教授の塩谷香先生が説明します。

「保育記録は、要録や指導計画の作成、また園内研修や自己評価にも活用できます。これらの業務をバラバラに考えると負担感が大きい

ですが、『要録の記入項目を意識した保育記録にする(※)』『保育記録で分かった課題をもとに指導計画を作成する』など、それぞれのつながりを意識することで業務は効率化しますし、計画から実践、振り返りまでの一貫性も高められます」

次ページからは、ポイントを押さえて高い効果の得られる保育記録の具体的な書き方をご紹介します。



※保育記録の要録への生かし方の具体例を17ページでご紹介しています。



STEP 1 保育記録をレベルアップさせる 4つのポイント

子どもの姿が具体的に見えやすい記録ほど、あとから保育の改善に結び付けることができます。事実のみを記録する「日誌」のようにならないように、子どもの言葉や表情、全体的な印象、保育者の思いなどを具体的に記し、感情や気持ちも記録することを心がけましょう。

た本人の姿だけでなく、保育者が用意した環境やまわり子どもとのかかわりに注意して記録する（17ページ上の例を参照）ことで、あとから子どもの成長や変化の様子がよく分かり、要録の作成に役立つようになります。

1 援助する前の子どもの姿

●子どものどのような姿から、その援助をすることを決めたいかを書きます。その際、周囲の状況も含めて書くと、要録の作成などに活用しやすくなります。例えば、「砂遊びをしていた」よりも、「ひとりで夢中になって穴を掘っていた」「ほかの子どもと楽しそうにトンネルを作っていた」といった記録の方が、あとから子どもの姿を振り返りやすくなります。

2 具体的な援助の内容

●保育者がどのような声かけや環境づくりをしたかを具体的に書きます。想定する反応や変化も書けば、保育者のねらいとのギャップが分かり、次の援助につなげやすくなります。

3 子どもの反応や変化

●保育者の援助に対し、子どもの見せた反応や変化を記録します。言葉だけでなく、表情や視線、全体的な印象、しぐさや行動などもあわせて書きましょう。例えば、「嫌い」という言葉は、実は関心の高さの裏返しであることが多いなど、必ずしも言葉だけでは気持ちが表されないからです。

4 今後の課題や援助

●「どうしてそうなったのか」「次は何をしたらいいか」などと、子どもの心に寄り添って考え、今後の課題や援助を検討します。必要に応じて、保護者との連携も考えると良いでしょう。

なかなか書き始められないときは…

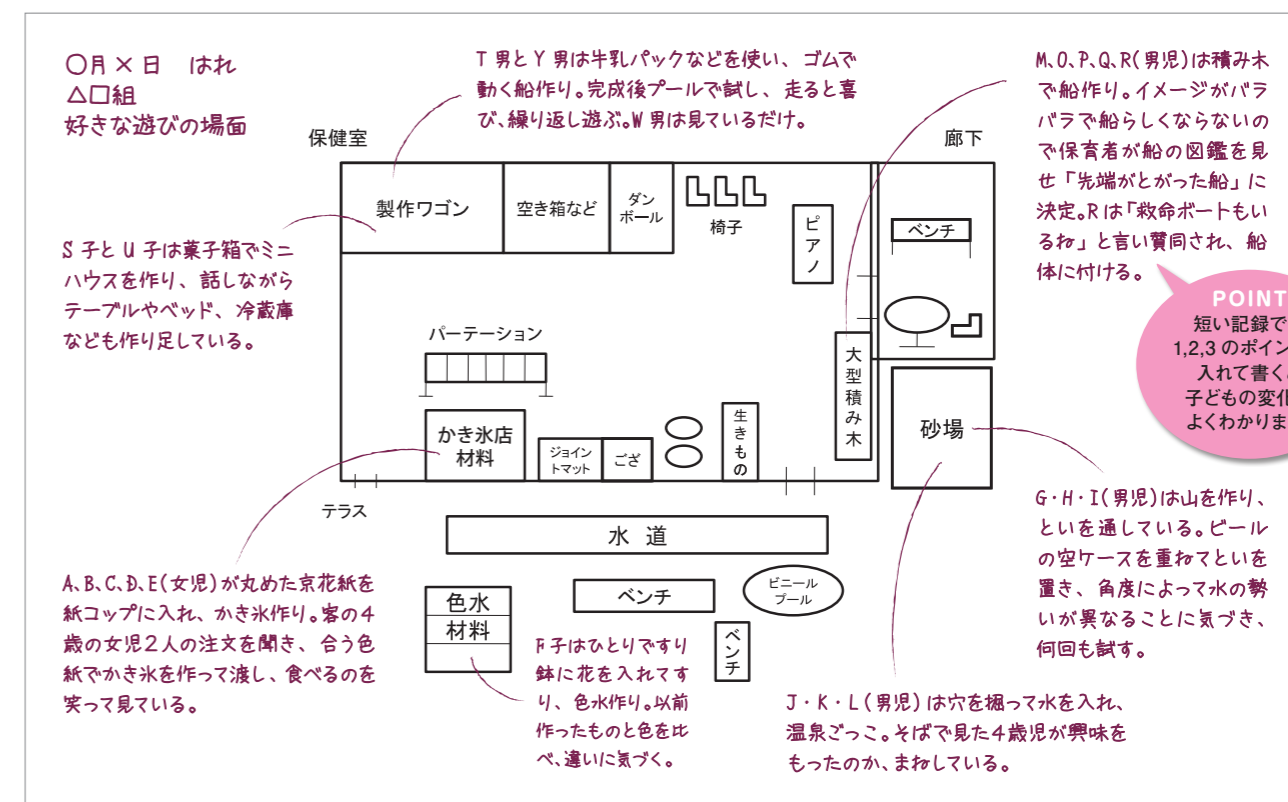
慣れないうちは、何を書くべきか迷うことがあるかもしれません。しかし、そのように考えること自体にも大きな意味があります。書くために考える作業を通し、子どもの心に改めて出会うことができるからです。実際の保育の場面では気づかなかったことに、書きながら気づいて次につながる援助が見えてくるでしょう。

最初は「無理に要点を絞ろうとせずに状況を細かに書く」「時系列に沿って書く」「保育者が子どもの情報を聞き合う（記録を読み合う）」の3点を心がけると、記録することに慣れてくると思います。

神長先生からのアドバイス

「4つのポイント」を踏まえた保育記録の記入例

園の見取り図に書いた保育記録の記入例 5歳児クラス自由遊びの場合



※18ページの神長先生のアイデアのイメージ図です。

月間でまとめた保育記録と要録への生かし方例 友だちに一方的に命令していたA児(5歳)の場合

《月ごとの保育記録例》

| |
|---|
| ●4歳児10月 |
| A児・B児・C児・D児が大型積み木で基地を作り、○○ごっこをしているが、A児は「おい、みんな、今度は戦いごっこをしよう」と言っただけで流れていき、他の幼児はそれに従って動く。 |
| ●4歳児11月 |
| A児が保育室の隅でシヨボリしている。理由を聞くと、B児・C児から「命令ばかりするからもう遊びたくない」と言われたそう。そこで「A児が楽しく遊べたのは、言う通りにしてくれる友だちがいたからで、友だちの言う事も受け入れることが大事だ」と伝える。A児はうつむきながら聞く。 |
| ●5歳児6月 |
| A児・B児・C児・D児が大型遊具を組み合わせ、城を作っている。A児は「この塔をもう少し高くしない？」と聞き、B児・C児・D児が賛同。B児が「お城にもお風呂つくらない？」というので、A児が「いいね、いいね。汗かいたら入れるね」と応じた。 |
| ●5歳児1月 |
| A児は生活発表会の劇「おむすびころりん」のグループに入る。それぞれやりたい役を伝え、受け入れられていくが、「いいおじいさん」の役をE児と取り合う。しかし、A児は「いいよ、ぼく『わるいおじいさん』で。だっさいないと劇できないし」と言っ折り合いをつけた。 |

《要録例》

A児はイメージが豊かで、遊びを楽しく展開している。しかし、4歳児のころ、一方的に命令するからという理由で遊んでいた仲間が離れていった。

そこで楽しく遊ぶためには、友だちの存在が大切なことや、友だちの考えや気持ちを受け入れることが大事なことを伝えたと、5歳児になつてからは、友だちのことを考えながら、活動できるようになっている。

まだトラブルを起こすことがあるが、気持ちを受けとめ、トラブルの要因などを具体的に話していくと納得して、気持ちの切り替えができる。協力することや友だちの必要性は理解できるようになっている。



保育記録 “アイデア集” ～わたしの担任時代～



保育記録の様式を少し工夫するだけで、短時間で記録できたり、子どもの姿がとらえやすくなったりします。神長先生、塩谷先生、そしてベネッセ次世代育成研究所の磯部頼子顧問が幼児教育の現場で担任を務めていたころに実践していた方法や他園の事例でよかった方法をご紹介します。

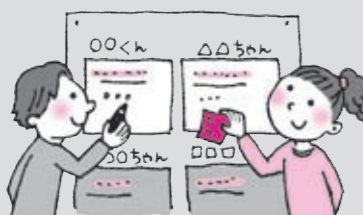
日案の環境図を活用して視覚的に記録 〈神長先生のアイデア〉

日案の見取り図（環境図）の余白に気になる子どもの姿などを記録する方法です。「あの子は、今日、砂場で遊んでいたな」などと、場所のイメージとともに子どもの姿を思い出して記録します。（17ページ参照）

こんな効果が期待できます

- 具体的な場所のイメージがあると、子どもの姿を思い出しやすい
- 周囲の環境とのかかわりを記録しやすい

記録しながら園全体で情報共有 〈塩谷先生より他園の事例〉



職員室に環境図や園児の名前の入った表をはっておきます。クラスをみていた担当者それぞれが、その日、気になったことや心に残ったことなどを書いた付箋紙をその表にはり付けていきます。

こんな効果が期待できます

- 自分が見ていないときでも子どもの様子がわかる
- 自分が気づかなかった子どもの見方を共有できる

連絡帳を複写式にして保育記録に活用 〈塩谷先生のアイデア〉



保護者への連絡帳には、子どもの姿や成長の様子がたくさん書かれます。連絡帳が複写式なら、写しは立派な保育記録になります。保護者に伝えるににくいことなどは余白に書き込んで補完します。

こんな効果が期待できます

- 保育記録と連絡帳を同時に記述できる
- 連絡帳は頻繁に書くものなので、継続的な記録になる

ひとりずつ時系列に記録して成長をみる 〈磯部先生のアイデア〉



大学ノートの2、3ページごとに1人ずつ、子どもの名前のラベルをはり、時系列に気になった言動を書いていきます。目立った行動や気になる行動があるときに、日付とともに書いておくと、あとから振り返りやすくなります。

こんな効果が期待できます

- 記録の偏りが分かり、もっと目をかけるべき子どもがわかる
- 一人ひとりの子どもを時系列に記録することで成長がわかりやすい

STEP

2

保育記録を活用した園内研修で 保育力を向上

保育者が保育記録を作成することに慣れてきたら、互いに情報を交換する園内研修を定期的の実施しましょう。子どもの実態や課題を共有し、園としての方針を強

化していくことができます。ここでは、保育記録を活用して効果的な園内研修を行うためのポイントをご紹介します。

園内研修の進め方

● 担任が園内で共有したい子どもの記録を学期ごとなどに整理します。日々の記録は「点」ですが、一定の期間を通して見ることで「線」として変化が見えてきます。



● 整理した記録を持ち寄り、みんなで記録をもとに話し合います。さまざまな経験をもつ保育者が子どもの変化を共有することで、担任が気づかなかった点が指摘されるなど、子どもの見方をより深めたり、新たな発見をする機会になります。



要録の作成に生かすには ● 初めに要録を作成する保育者は、要録の「下書き」を作成して研修に持ち寄ることができれば、子どもの情報を共有すると同時に、他の保育者からのアドバイスを通して要録の作り方を学べます。

園内研修のポイント



子どもや保育者の良い面に目を向けて話す

● 子どもや保育者のマイナス面ではなく、プラス面に目を向けましょう。特に保育者は年齢や経験などにかかわらず、お互いの考えや意見を認め合えると、研修は活性化してより有意義なものになります。

インフォーマルな情報交換も大切に

● 園全体で実施する「フォーマル」な園内研修のほか、休憩時間や作業時間などに保育者が子どもについて会話する「インフォーマル」な情報交換も大切。こうした雑談のような情報交換が自由に行われる雰囲気があると、園内研修での意見交換も活発になります。

幼児の生活と子育て意識 ～5年の変化～

ベネッセ次世代育成研究所では、2010年3月に、首都圏の未就学児をもつ保護者約3,500名を対象に「幼児の生活アンケート」を行いました。ここでは、園児の生活習慣や保護者の要望を中心に紹介します。園だよりや保護者会などでの話題提供の資料としてご活用ください。

今回ご紹介するデータの調査概要

調査名 第4回幼児の生活アンケート

調査テーマ 乳幼児の生活の様子、保護者の子育てに関する意識と実態

調査対象

第3回調査 (2005年調査)

首都圏 (東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県) の0歳6ヵ月～6歳就学前の乳幼児をもつ保護者2,980名 (配布数7,200通、回収率41.4%)

第4回調査 (2010年調査)

首都圏 (東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県) の0歳6ヵ月～6歳就学前の乳幼児をもつ保護者3,522名 (配布数7,801通、回収率45.1%)

※いずれも分析対象は、1歳6ヵ月～6歳就学前の乳幼児をもつ保護者

調査方法 郵送法 (自記式アンケートを郵送により配布・回収)

調査時期 第3回調査 2005年3月 第4回調査 2010年3月

備考 ※調査項目は経年比較が可能なように配慮した。

引用・掲載する際のお願い

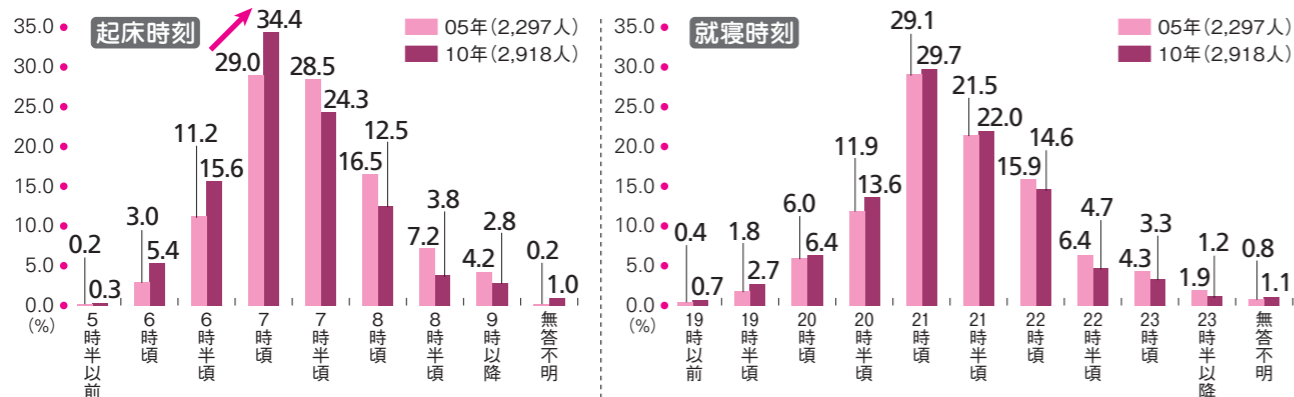
本調査の結果を引用される際には「ベネッセ次世代育成研究所『第4回幼児の生活アンケート』」と記載してください。

詳細の結果はベネッセ次世代育成研究所ホームページをご覧ください。
<http://www.benesse.co.jp/jisedaiken/>

早寝早起きの傾向が進んでいる

Q お子さまは平日、何時頃に起きますか。夜、何時頃に寝ますか。

図1 起床時刻・就寝時刻



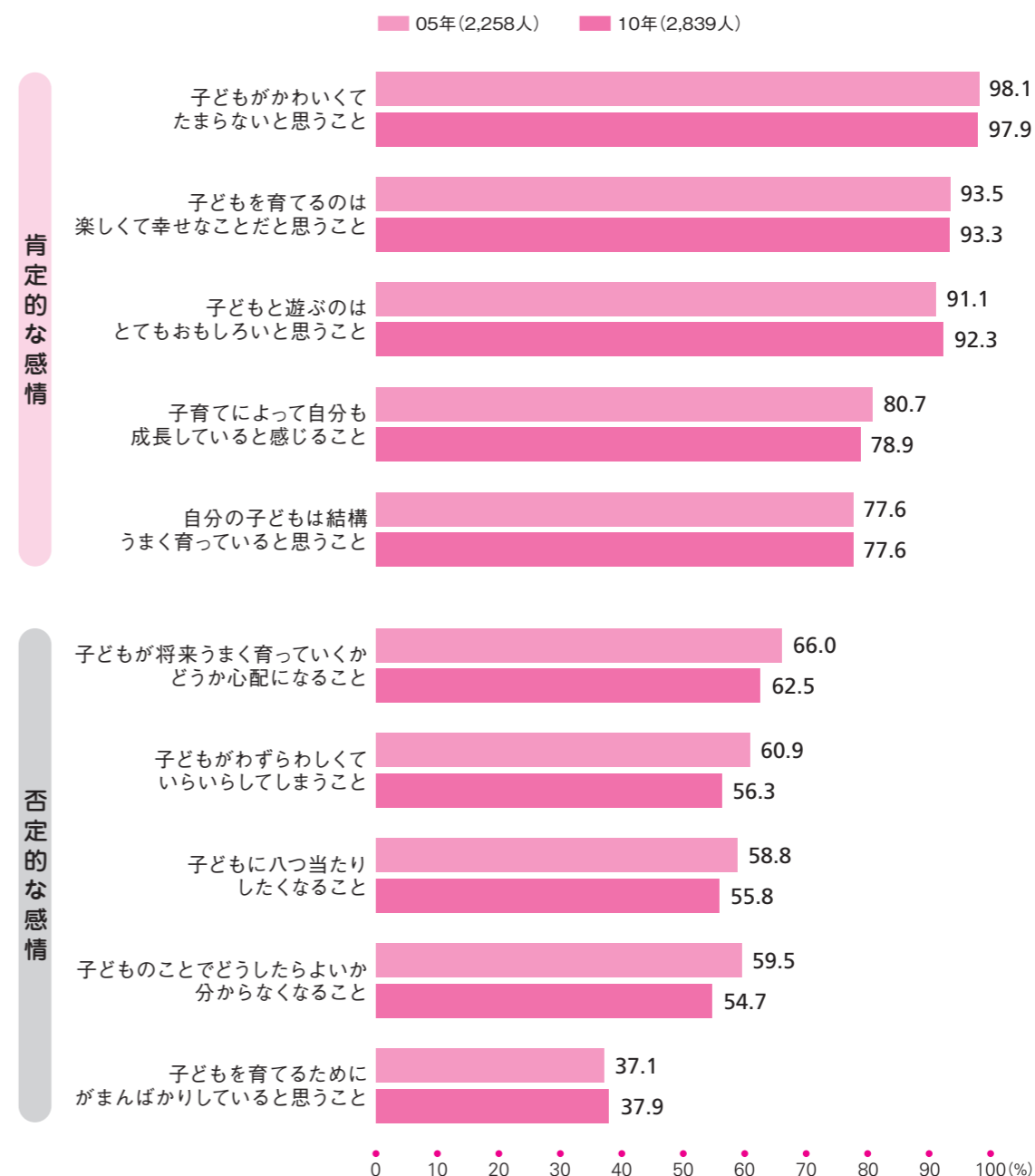
★平日の起床時刻を聞いたところ、2010年は約80%の子が7時半頃までに起床し、また約75%の子が21時半頃までに就寝することがわかりました。5年前と比べると、

7時半頃までに起床する子どもが約8ポイント、21時半頃までに就寝する子どもが約4ポイント増えており、早寝早起きの傾向が進んでいます。

子育てへの不安感、5年前より減少傾向にある

Q あなたは最近、子育てについて次のようなことをお感じになることがありますか。

図2 母親の子育て意識



注1 「よくある」+「ときどきある」の%。 注2 母親の回答のみ分析。

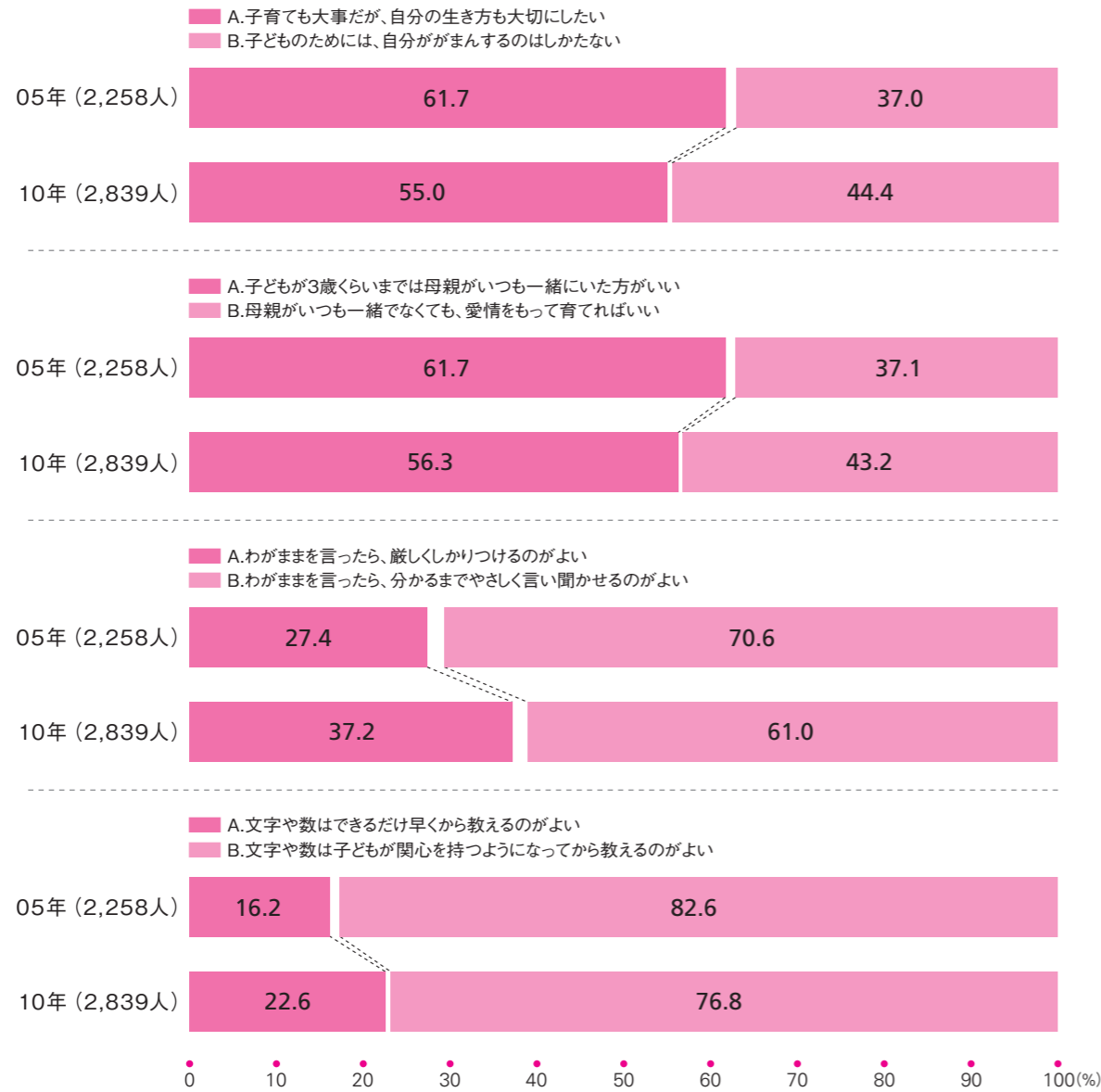
★子育て意識をたずねたところ、5年前から引き続き9割以上の母親が「子どもがかわいくてたまらない」「子どもを育てるのは楽しくて幸せ」「子どもと遊ぶのはとてもおもしろい」と思うことがありと答えています。一方、「子どもがわ

ざらわしくていらいらしてしまう」「子どものことでどうしたらよいか分からなくなる」などの子育てに対する否定的な感情は、5年前より減少しており、子育てへの不安感が弱まってきた傾向がうかがえます。

厳しく叱る意識をもっていたり、 文字・数の学習に熱心な母親が増加している

Q 子育てに関するAとBの2つの意見のうち、あなたのお気持ちに近い方はどちらですか。どちらかといえば近い方の意見に○をつけてください。

図3 母親の子育て意識



注1 無答不明があるため、Aの意見とBの意見の数値を合計しても100%にはならない。 注2 母親の回答のみ分析。

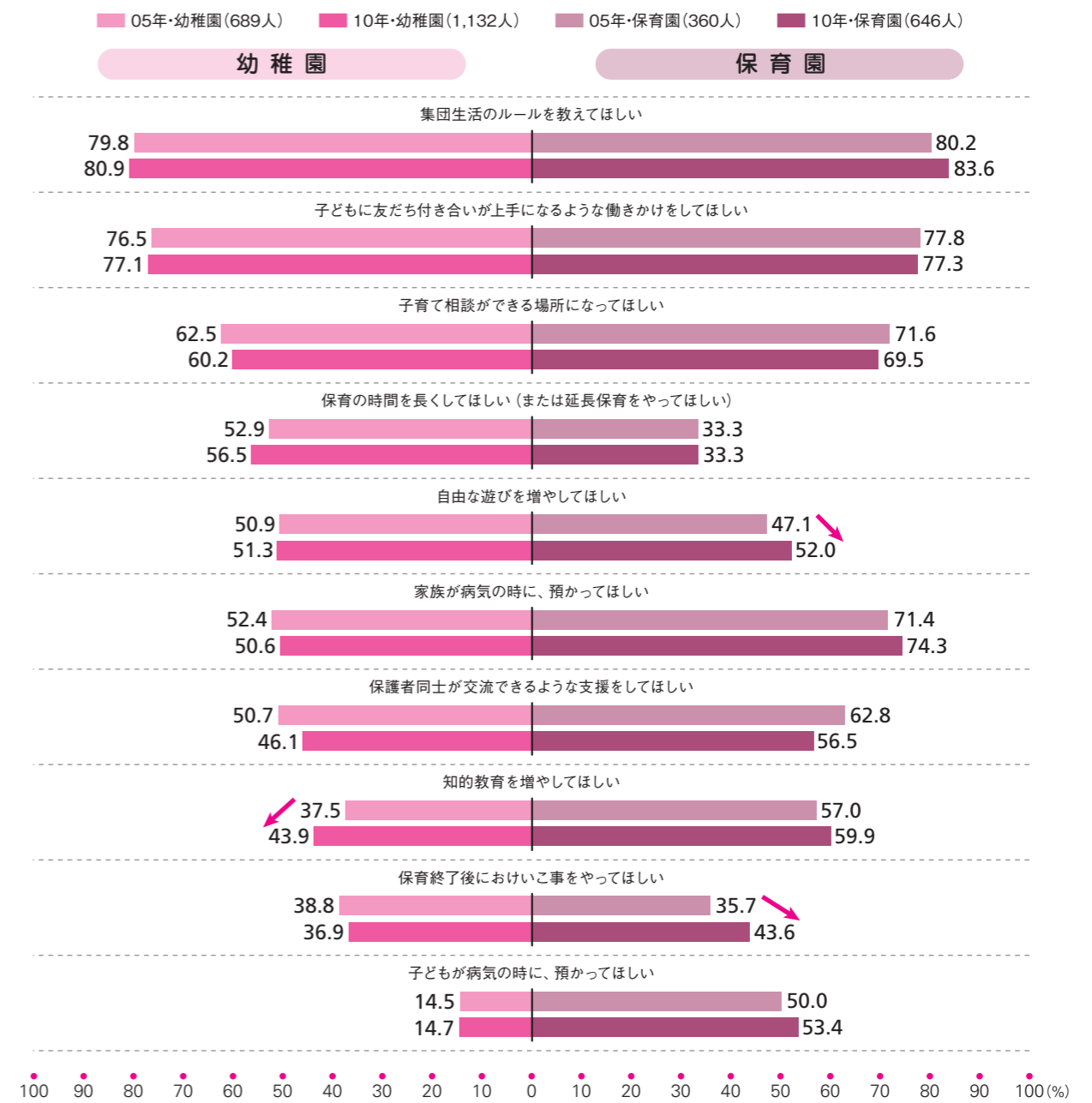
★ここでは、母親の子育て観に関する意識について、5年間で変化がみられたものをご紹介します。少数派の意見ではありますが、約10ポイント増加ともっとも大きな変化がみられたのは、「わがままを言ったら、厳しく叱りつけるのがよい」と答えた比率でした。「文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい」と答えた比率も増

加しており、文字や数の学習への意識も高まりつつあるようです。また、「子どものためには、自分ががまんするのはしかたない」「母親がいつも一緒になくても、愛情をもって育てればよい」と答えた比率も増加しており、母親の子育てに対する意識に変化がみられました。

保護者の要望として、幼稚園へは知的教育を 保育園へはおけいこ事が増加している

Q 現在通っている幼稚園・保育園について、あなたは次のことをどう思いますか。

図4 幼稚園・保育園への要望



注1 「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。 注2 子どもが通園している母親の回答のみ分析。 注3 母親の回答のみ分析。

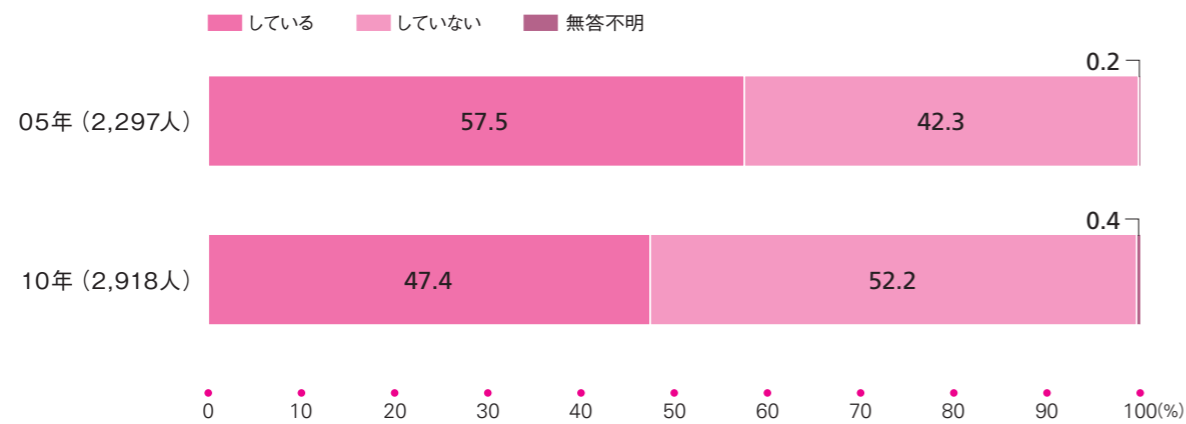
★園への要望を幼稚園・保育園別に集計したところ、5年前と比較して、幼稚園では「知的教育」についての要望が6.4ポイントももっとも増加していました。また、保育園では、「保育終了後のおけいこ事」や「自由な遊び」などを求める声

が増えていきます。一方、幼稚園・保育園ともに5ポイント前後下がっているのは、「保護者同士が交流できるような支援をしてほしい」でした。保護者同士の交流を園に望む人は、5年前より減る傾向がみられました。

習い事をしている人の割合も その金額も5年前より減少傾向

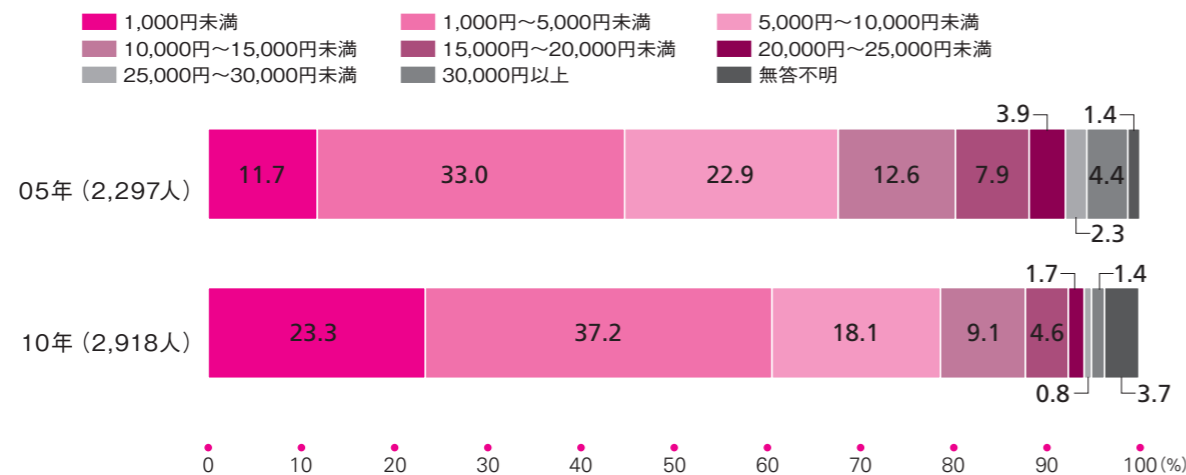
Q お子さまは現在、習い事・おけいこ事をしていますか。
(幼稚園・保育園で有料で習っているものや、塾・通信教育を含みます)

図5 習い事の状況



Q 現在のお子さま1人にかかる
1ヵ月あたりの塾・通信教育・習い事・絵本・玩具等の費用はいくらですか
(幼稚園・保育園で有料で習っているものは除きます)

図6 1人あたりの教育費



★習い事をしている人の比率は、5年前と比較して約10ポイント減っていました。また、習い事・おけいこ事などにかかる金額は「1,000円未満」が約12ポイント増加、ついで

「1,000円~5,000円未満」も増加し、5,000円以上かけるという回答は減少しています。世の中の経済状況の影響が習い事・おけいこ事にもあらわれているのかもしれませんが。

ベネッセ次世代育成研究所からの発刊物のご案内

これからの幼児教育を考える



2010 夏
特集
家庭と連携した食育活動のあり方とは
◎新しい保育所保育指針、幼稚園教育要領でも「食育」の重要性が挙げられています。大澤力先生のインタビューと園の実践事例などから、園と家庭が連携し、子どもが意欲的に食にかかわれる食育活動について考えています。
A4判 24ページ



2009 秋
特集
保育者の資質を高める園内研修とは
◎保育者が自らの保育を振り返り、気づきを得られるような「園内研修」とは？秋田喜代美先生のインタビュー、大豆生田先生のQ&A、園内研修の具体的な手法を実践事例とともに紹介しています。
A4判 24ページ

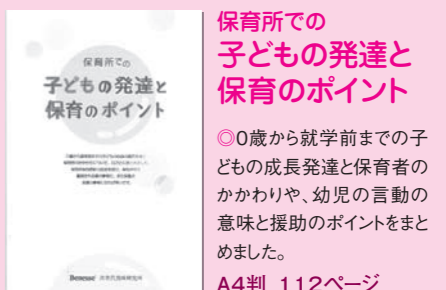
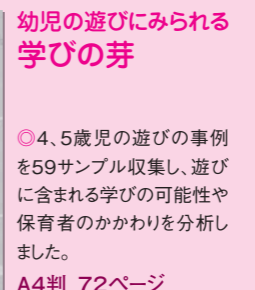
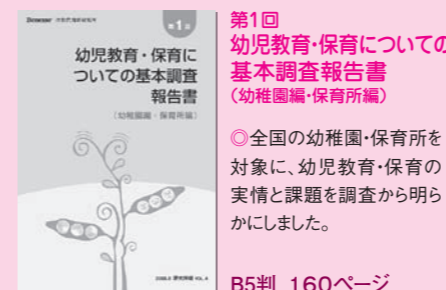


2010 春
特集
保護者の成長を促す園の支援とは
◎園と保護者が互いに協力関係を築き、子どもの健やかな育ちを見守っていくために、園ではどのような働きかけを行うとよいのでしょうか。子安増生先生のインタビュー、公私立幼稚園・保育所の事例を紹介しています。
A4判 24ページ



2009 夏
インタビュー
幼保一体化と新しい幼児教育
◎今後の動きが目される幼保一体化について、その課題や展望を汐見稔幸先生と無藤隆先生の巻頭対談でとりあげます。また、幼保公私さまざまな立場のかたからの寄稿から新しい幼児教育を考えています。
A4判 24ページ

幼児教育・保育に関する発刊物



上記の刊行物はすべてホームページからご覧いただけます。

各種検索エンジンで「ベネッセ次世代育成研究所」と検索してください。

ベネッセ次世代育成研究所

検索

<http://www.benesse.co.jp/jisedaiken/>



編集後記

特別支援・障害児教育を取り上げた今号はいかがでしたか？「幼児期は、誰もがみな気になる存在であるべき」「発達障害の子どもの気持ちを受け入れて育てると、次第に問題行動は少なくなる」という先生の言葉が印象的でした。これからも現場に役立つ情報をお届けするため、みなさまのご意見・ご感想などをお待ちしております。(橋村)

「これからの幼児教育を考える」2010秋号

2010年9月20日発行

発行人 新井 健一
編集協力 (有)ベンダコ/二宮良太
編集人 後藤 憲子
印刷・製本 (株)協同プレス
企画・製作 ベネッセ次世代育成研究所
発行所 (株)ベネッセコーポレーション
〒101-8685 東京都千代田区神田神保町1-105
神保町三井ビルディング

次号予告


これからの 2011 Spring 春
幼児教育を考える

次号は2011年1月下旬発行(予定)
年3回の発行(予定)です

表紙／裏表紙

東京都 ● 葛飾こどもの園幼稚園

お問い合わせ先

 **0120-933-964**

受付時間 10:00～17:00(日曜・祝日は除く)

※通話料無料

※番号をよくお確かめのうえ、おかけください。

※携帯番号・PHSからもご利用できます。

※上記番号に接続できない通信機器・回線の場合は、**086-214-6337**へおかけください(ただし通話料がかかります)。